

## 「いのち」を基盤にした市民団体の社会活動が伝えられたもの

Research on having told by civil society activity which is on a base “INOCHI”

山下 恵子 (子どもを亡くした親の会)

Keiko YAMASHITA

吉澤 浩子 (生きることいのちを考える会)

Hiroko YOSHIZAWA

芝波田和子 (犯罪被害者遺族の会)

Kazuko SHIBATA

## 要旨

それぞれの活動団体が「いのち」をキーワードとして地域社会に向けて協働し発信している“いのちを見つめるパネル展”という市民社会活動の実践から参加者のいのちの受け止めをまとめた。記述された内容から感謝と今ある幸せを感じる＜いのちへの想いを感じる＞＜自分のいのちや自分のグリーフと向き合う＞＜社会や周囲の人のいのちに気づく＞＜これからの生き方や行動、きっかけ、希望につながる＞5つのカテゴリーに分けられた。参加者は、パネル展からのメッセージや講演会、コンサートから自分なりにいのちを感じ、受け止めていることがわかった。

【キーワード】いのち 市民社会活動 グリーフ

## 1. はじめに

子どもを亡くした親たちがその喪失体験から「いのち」について考えさせられ、その後自分自身が生きる意味を問いながら生きている。生きる意味を問う中で自分自身の生き方を考えつつ社会に向けて活動している人たちも少なくない。子どもを亡くした親の会(松本市)・生きることいのちを考える会(松本市)・長野県犯罪被害者遺族の会(長野市)では、松本市梓川アカデミア館や松本市内の公民館などを拠点に地域に向けて、今あるいのちについて少し立ち止まって考えてもらうことや今あるいのちはかけがえのないものであることを感じてもらうことを目的に、市民活動グループが協働し、2005年から毎年「いのちを見つめるパネル展」を行ってきた。このパネル展は、年1回行い、子どもを亡くした親達の子どものメッセージや子どもの写真、遺品を展示、病気の子どもの院内学級での作品、障がいをもつ子どもたちの作品などの展示をする活動を続け、2012年で8回目を迎えた。

2011年3月11日に起きた東日本大震災やそれに伴う原発事故の放射能の問題は、日本中に生きることや死ぬこと、今まで抱いていた価値観や今ここにある“いのち”の意味、大切なものの喪失体験を通して生きることを意味など様々なことを問われる機会となった。2011年はこの震災を機に被災地からのメッセージや写真を加え、それぞれの活動団体の

想いの中にある“いのち”を地域の人々に伝えるべくパネル展を開いた。また、2008年から我々の活動に共感し、寄り添ってくれているポップスクラシックの音楽グループの会場内でのコンサートも実施している。

今回、この活動に参加して下さった方々にアンケートの感想から、これまで行ってきた活動で「いのち」がどのように受け止められているか、またこの活動の意味や今後の活動のあり方を考えたのでここに報告する。

## 2. 研究方法

## (1) データの収集方法

2012年8月3日～5日までの3日間で、「いのちを見つめるパネル展」を見に来た方、「講演会」「コンサート」に参加した方に対して、質問紙を配布し、その場で回収した。

## (2) データの分析

記述された内容をデータとし、それぞれをカテゴリーに分け、タイトルをつけた。

## (3) 倫理的配慮

質問紙に調査の趣旨を記載し、趣旨を理解してもらえた上で提出は自由意思とし、提出を持って同意を得たとした。

## 3. 「いのちを見つめるパネル展」の歩み

- 第1回（2005）：松本市梓川アカデミア館にて生きるここのちを考える会・犯罪被害者遺族の会の2団体共同で始める。
- 第2回（2006）：松本市アカデミア館より子どもを亡くした親の会も加わり3団体で行う。  
劣化ウランの現状の報告展示
- 第3回（2007）：松本市中央公民館
- 第4回（2008）：松本市南部公民館
- 第5回（2009）：松本市アカデミア館 会場内コンサートと同時開催。四川大地震写真展
- 第6回（2010）：松本市アカデミア館 野本氏の絵画展 会場内コンサート
- 第7回（2011）：長野市中条音楽堂 東日本大震災の被災者のおはなしおよび写真展示  
会場内コンサート  
プレ企画として、中条でのパネル展前日に松本市あがたの森にて被災者とのいのちについての車座トーク
- 第8回（2012）：松本市あがたの森 講演会「流した涙の先に・・・」竹内正人氏（産科医）  
会場コンサート



各回とも、身近でいのちを感じながら生きている入院中の子どもたちの作品の展示や障がいを持つ方の作品展、その時々

の社会状況の中での「いのち」を感じてもらえるようにパネル展とともに実施。今年度は、初めて産科医としてのちと向き合ってきた先生をお願いし、会場での講演会を実施した。

新聞への開催のお知らせとともに、会の仲間が個人個人で知り合いの方に手渡しでチラシを渡し、そのチラシをもらった人がまた知り合いに伝えるという、人と人がふれあいながらの広報活動で進めてきた。会場内コンサートでは、「いのち」を精一杯生きている子どもたちの作品と共に亡くなった子どもたちの「いのち」を感じつつ、その親の想いのメッセージを感じつつ、今ここにある自分の「いのち」を感じてもらえることを願って行ってきた。

#### 4. 2012年「パネル展」「講演会」「コンサート」

#### に参加した方々の「いのち」の受け止め

今回会場に訪れた方々に感じ取ったいのちについて自由に書いてもらった。その内容をカテゴリーにまとめて表題をつけた。

＜感謝と今ある幸せを感じる＞＜いのちへの想いを感じる＞＜自分のいのちや自分のグリーフと向き合う＞＜社会や周囲の人のいのちに気づく＞＜これからの生き方や行動、きっかけ、希望につながる＞の5つのカテゴリーに分けられた。

##### 1) 感謝と今ある幸せを感じる

64個の感想のうち、14個が感謝や幸せを感じているというものであった。具体的には、「毎日があることに感謝しないとね」「予期せぬ自分自身の事故とともに今回のパネル展で生きていることに本当に感謝した」「今、自分が生きていることが当たり前前の幸せを感じている」「周りの身近な人たちが次々と他界していく中で、息子のことで悩み色々あったがこうして生きていることに感謝」「今生きている事のありがたさを改めて噛み締めました」「いのちのありがたさを実感」などが挙げられていた。いのちへの感謝と今ある幸せを受け止めていた。

##### 2) いのちへの想いを感じる

「胸が打たれる。亡くなくても亡くなった人は人の身体や心の中にいき続けるだろうけど、あえなくなつたのは辛いし、悲しい、切ない。でもその気持ちを持ち続けながら人は歩いていくんだろう。歩いていくのもしんどいし、苦しいし。でも歩いていくんだろう。落ち込んだり、前向きになれたりしながら。でもそこまでいくのは人事のようで嫌ですけど、並大抵のことではない。生きているってそういうことなんだろう。」「パネル展はやっぱりいのちの大切さを感じました。そして人の心を想う大切さ、そしてずっと想いつづけることの大切さ、伝わっているのかわからない、やるせない気持ちの中で手紙を書き続けること、すごいと思いました。絶対に届いていると思います」「姿は見えなくても家族にとっては常に一緒に生きているということを改めて知った」「涙も悲しみもいつか人を励ましたり、勇気を与えるものに変わるんだなあと思いました。生き続けていると思いました」「自分にも子どもがいるので、自分より先に子どもが亡くなるのを目の当たりにするのは悲しいことだろうなといたたまれない思いがしました」など多くのメッセージなどで体験している人たちの想いに気がついてた。

##### 3) 自分のいのちや自分のグリーフと向き合う

「普段グリーフとは真逆の誕生の現場にすることが多いです。そのため、いのちの誕生に向き合うたびに自分自身“いのち”を考えることが多いです。しかし、最近はいじめ、自殺のニュースが多く目に

耳にするたびに亡くなったお子さんが生まれたときのご両親の姿が思い浮かびます。」

「私は結婚して9年になりますが子どもがいません。私の歳もタイムリミットを迎えてしまったので、時折ものすごい悲しみに襲われることがありました。今もたまにありますが、亡くなってしまう痛みも色々考えます。考えながら自分自身を見つめなおしていけばとそれでも明るく生きて行こうと思います。ぽつんと空いている心の穴は埋めることはできないと思います」「ここだったら悲しんでもいいかなあと思いました。長い時間悲しみに向き合っておられる方の存在を知り、私もまだまだ悲しんでもよいのだなあと思うことができました。“悲しむな”“泣くな”と他者に説くことのほうが実はおかしいことだと思っていましたが、それが確信に変わりました」「いのちの“重み”とその“はかなさ”を感じています。命にあふれる職業に就くものとして、その重みに耐えられず逃げたくなるときもあります、きついけれど向き合うことが自分に課せられた課題だと思っています」「忘れていたことを思い出しました。重いです」「当たり前だけど不安」「明日も命があるとは限らないこと、今日を一生懸命生きていかなければいけないことを考えさせられました。残された家族をもっと悲しませているものは無関心で“社会を変えなければいけない”と行動していないのは自分のような気がしました」など他人のグリーフから自分自身の心へ向かい、その中で自分自身のグリーフにも気づき向き合っていた。

#### 4) 社会や周囲の人のいのちに気づく

「毎日のように報道される悲しい出来事、特に人の命を簡単に奪うということに悲しい思いを抱く」「いのちの大切さについてジーンと来ました。私の家族、友人、周りにいる人、すべてのいのち。仕事では死ぬ方が多く看取りなどが多いです。これから私の孫娘など小さな命を大切にしていきたいです」「周りの人を大事にしていきたいと思いました」「“かけがえのない命” 当たり前に使われるけど、自分の命は自分のものだけど自分のものだけじゃない、自分を大切に想ってくれる人たちのものでもあるんだな」など社会や自分の身近な周囲の人たちのいのちについて感じ取っていた。

#### 5) これからの生き方や行動、きっかけ、希望につながる

「胸が一杯で言葉になりません。自分が辛かったり、悲しかったり苦しいとき、言葉なくとも想いを感じてそっと隣にいてくれるだけで心がやわらかくなる、泣きたいとき一人で泣くより誰かにすがって泣くことができたなら一歩進める気がする。そんな誰かに私はなりたいたと思いました」「自分は健康に生

まれたのでいのちについて考える機会は今までなかった」「いのちについて考える、気に留めるきっかけになりました」「いのちのつながりについて考えさせられた」「今でも命について毎日考えます。命とは一体何なのかわかりませんが、経験したことから学んだことを忘れずに瞬間このときを大事に周囲の人たちを大切に丁寧に生きていけばそのうち気づくこともできるかなと思っています」「何かに命がけになることは必要だが、理不尽ないのちの亡くなり方はなくさなければならぬ」「人が一人ひとり大事にされる世の中にしたいです」「じっくりと考える機会が亡くなっていたので、今一度自分と周りの関係を考えないと思った」「生かされているいのち、生きていることの意味を色々と思いながら後悔しながら生きています。どんな命でも生きることの大切さを考えていきたい」など感じ取ったいのちを自分自身の生き方や行動、希望に結びつけていた。

### 5. 考察

#### 1) 心の根底にある「いのち」感じ取る

社会が激しく揺れ動いているときに、実は揺れているのは自分の心であるのではないかと感じることもある。まず、自分た



ちの心の根っこをしっかりと定める必要性があり、目には見えない心を定めるためには自分にとって大切なことは何かを確信すること、つぎにどう生きるかどう働くかと自分に働くかと自分に問いかけることが大事である。(鈴木 2012) 変化が激しい状況に振り回されることなく自分が生きていくためには、「いのち」をどう実感するかがとても重要になる。

このパネル展の活動を始めて8回になり、その中で私たちが地域の人々に伝えかった「いのち」というキーワードは、継続することによって少しずつではあるが参加した方々の気づきにつながり、自分自身だけではなく周囲の人たちのいのちにまで思いを馳せていることがわかった。また、子どもの死を体験している者たちがいのちをどうとらえ、生きているかも伝えられているのだと思う。それが伝わっているからこそ、これから自分がどう生きていくかということや希望にまでつながる受け止めができていくのだと考える。

病気と闘ったいのち、予期しない事故や事件に巻き込まれたいのち、病気や障がいと共に一生懸命生きていくいのちをメッセージとして伝え続けることが重要である。

## 2) 感じ取ったいのちを表現することで、次のステップへつながる

展示や講演会、コンサートから感じ取ったものを自由に表現してもらった。表現することで自分が感じ取ったものがどのようなものであるのか回答者自身が明らかになっている。そして私たちの活動の原点にある「いのち」を感じ取り、表現し、まとめることで希望にまでつながっていることがわかった。これは、なくなった子どものいのちを身近な人たちが悲しみの中でも受け取り、受け止め、メッセージとして伝えることにより、確実にいのちがつながって言っていることがわかる。また、「いのち」を表現したことにより、主催者と参加者の間に相互作用が生まれていると思う。

大切な人を亡くすとは、死なれる体験をすることである。その人の夢や希望、生活を失う。死なれた人は、元の生活に戻る・立ち直るということではなく、大切な人がいない新たな人生を再構築して行くことだと考える。その過程の中に、年に1度のパネル展を通して亡くなったいのちと向き合い、昨年とは異なる自分に気づき、来訪した方々が感じ取ってくれた「いのち」でまた生きていくことができるようになっている。

今回の「いのちを見つめるパネル展」「講演会」「コンサート」の企画、調査は松本短期大学看護学科共同研究費の助成を受けて行ないました。

## 引用・参考文献

- 上坂良子、辻幸代 (2003) : 看護婦大関和の著述からみた社会活動の今日的意義  
和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要 No. 6  
p1-16
- Robert A. Neimeyer (2002) / 鈴木剛子 (2006) :  
＜大切なもの＞を失ったあなたに 春秋者 東京
- 鈴木中人 (2012) : 人は転んで、起きて人生を積み  
刻んでいく No440 p28 - 32 致知  
致知出版社
- 鈴木中人 (2011) : 人生のそのときに 心に刻む 10  
のこと 致知出版社 東京
- 山下恵子 (2009) : 悲しみに寄り添って 松本短期  
大学研究紀要 No. 18